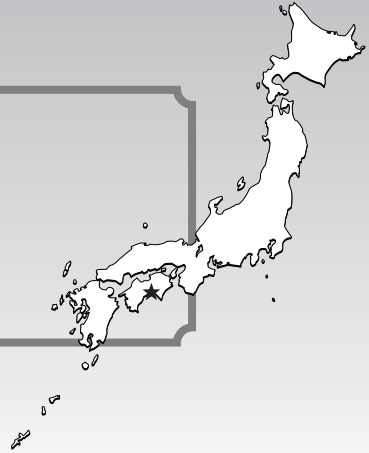


新版 全国衛生研究所見聞記 【其ノ拾壺】 高知縣衛生研究所之巻



文人氣取りで土佐入りせむとするの愚

大正五年某月某日、土佐生まれの文人にして紀行文の大家、大町桂月を乗せた「(三崎港から日本橋へ) 魚類の運搬を主とし旅客を副とせる汽船」が、浦賀を経て今しも品川の埠頭に接岸しようとしている。.....

風あれども、波たゞず。如何に船に弱き人として、この船には酔はざるべしと思はるゝばかり也。而も涼しく、而も月明かに、船は靜に金波銀波の上を行く。(中略) されど夜の二三時となりては、涼しさ過ぎて、むしろ寒さを覺ゆ。眠くなりては、正坐も苦しくなりぬ。されど身を横にするの餘地なし。若き女起き上りて、餘地あり。身を横にす。幾時間か眠りけむ、眼をさませば、月落ちて、日未だ出でず。曙色天に満ちて、品川の砲臺、近く船尾に見えたり。(出典：大町桂月「月の東京灣」)

その品川の住人である探訪子は、約百年後の平成20年12月16日、伊豫松山から山越えて桂月の故郷土佐に入境しようとしている。

無論軟弱にして老殘の此の探訪子を選んだ陸路行は、徒歩ではなくバスに依った。しかしもっと安易な、羽田から高知龍馬空港へ一足飛びする空路を選ばなかったのは、前夜松山に立ち寄る用事を抱えていた(正確には「作っていた」)からでもあるが、たまには陸路でユルリと土佐入りしてみたかったからである。その裏には、道中の景色やら偶然の隣人との「旅は道連れ」を楽しみながら、桂月のひそみにならない、紀行文もどきの文章に挑戦してしてみようという不遜な下心もあったのだが、それは同時に「片思いの土佐」に対する敬意の表明でもあった。

しかし事は中々計算通りには運ばない。空席だらけのバスに「若き女」が乗り來たりて探訪子の隣席

に座る等の僥倖は一切なく、窓外景物を賞すべき桂月流美文の才も勿論なく、探訪子は、宿酔と車内禁煙への対策として松山驛前の路傍で買い求めし愛媛蜜柑(8個入り1パック250円也)をば、その安さと美味に感激しつつ只管食べ續けるうち、バスが川之江インターを過ぐる頃には遂に惰眠を貪る車上の客となりて、文人墨客の夢は敢え無く水泡に歸しぬれば、松山定宿の稲田忠子女將の豫言「バスで高知へ? トンネルばかりじゃけ退屈して直ぐにウタタ寝するわ」が見事的中したるこそ可笑しけれ。

無味乾燥男三人組の蔭に女あり

松山を發つて約2時間半の後、我々は播磨屋橋のバス停に降り立っていた。我々? 述べ遅れたが今回も同行者が二人。栄研化学の荒川氏と牛久保氏である。従前必ず同行してくれていた大森圭子女史(=本誌の編集長)は、社内の昇任試験と日程が重なり、今回は不在である。

ハプニング女王=大森女史の不在の所為でか、結果的に今回の取材旅行は何のトラブルもなく終了することになるのであるが、謹嚴實直劍士=荒川氏に率いられた男三人組の旅は流石に殺風景で無粋極まりない。播磨屋橋付近の食堂に入って、夫々ライスカレーとスパゲッティーと日替ランチを食べながら、「あっ阪神タイガースの選手の色紙が壁に飾ってありますね」、「何故だろうか」、「高知で春期キャンプをするからでせう」、の如き無味乾燥的會話を交わすのが関の山。佛頂面して早々に食べ終わった後の手持ち無沙汰に、「高知衛研に2時に到着する為には此處を何時何分に出て/何時何分に〇〇ホテルに荷物を預け/何分かけて高知衛研まで歩き、.....」といったダンドリを市内地圖参照しつつ没

情緒的に鳩首協議するしか藝のない男三人の脳裡には、異次元の人＝大森女史の能天気な笑顔が、この時もその後も、幾度も過（よぎ）った。

午後2時。豫習の甲斐あって定刻通り、高知城の北側にある高知縣保健衛生綜合庁舎の門前に我々は到着した。



写真1 高知縣保健衛生綜合庁舎の前景。高知衛研は此の建物の2～5階の大部分を占めている。

玄関先では間崎陸次長が少々緊張の面持ちで我々を出迎えて下さっていた。



写真2 今回の取材の受け入れを擔當してくれた間崎次長(→)。

(I) 福永和俊所長は開口一番「おまんはどういて高知みたいな辺鄙なくへ来る氣になったがぜよ?」

これまでの衛研訪問の場合だと、先ず玄関で靴を脱ぎスリッパに履き替え、案内役の次長氏等に先導され、色々とイントロ的な説明を受けながら所長室へと赴き、.....という進行になるのが常であったが、今回は何かがいつもと違う。第一、スリッパが無い。第二には、案内役の間崎次長が何故か殆ど無口である。第三には、いつのまにか所長先生が我々と並んで一緒に歩いておられ、所長

自らが多辯なガイド役を務めておられる。第四には、招じ入れられた場所が所長室ではなく、だだっぴろい事務室の中の片隅の、「會議コーナー」とでも稱すべき一角だった。

だからどうだという譯ではないが、この、他處の衛研を訪問した時とは一風變ったスタートの仕方に、探訪子が一種違和感（あるいは緊張感）を覺えたのは事實である。ひょっとしたら大森女史の不在が探訪子を少々神經過敏にしていたのかもしれない。しかし、會議コーナーの椅子に座し、福永所長と正面から對峙した瞬間に、探訪子の緊張は忽ちにして解けた。

男の顔を論評の對象にしては絶対に不可い、と前々回の島根縣之巻（モダンメディア54巻9號参照）に書いたばかりの探訪子であるが、福永所長の迫力に満ちた顔貌を目前にしては、早々と此の禁を破らざるを得ない。好むと好まざるとに拘らず、

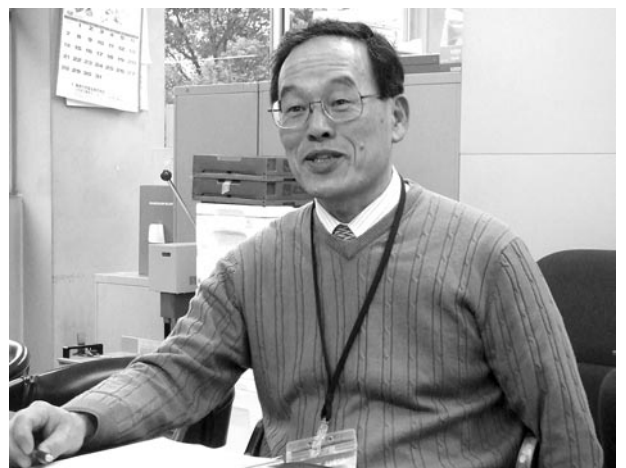


写真3 福永所長の初期設定顔貌はイゴッソ面相である(上)。しかし熱辯が一段落するや(上着も脱いで)好々爺顔貌に變化した(下)。

男の顔のキャンパスには積年の個人史の山あり谷ありが痕跡となって描刻されている。その痕跡を取って隠すか隠さぬかには上手下手の個人差があり、概してその隠蔽技術の下手な人物の方が、他人からは愛される。福永所長は「いごっそ」だから、無論それが下手である。かなり下手である、と探訪子は独自の観相術に基づいて断言する。

要するにイゴッソは骨太で真っ正直なのだ。男の生き様を隠し立てする必要など何處にもない、と福永所長のデフォルト顔には書いてある（思い起こせば、高知在住の畏友、地球33番地クリニック院長前田隆先生の顔からも、同じメッセージが初対面時に読み取れた）。

その顔で、「おまんはどういて高知みたいな辺鄙なくへ来る氣になったがぜよ？」と、開口一番、ド真ん中への直球勝負で問われたからには、如何に老獪なる曲球詭辯師を自負する探訪子と雖（いえど）も、真っ正直に答えるしかない。「主には酒の縁です」と短く答えた。

短か過ぎて反應がなかった。……（数秒の静寂）……矢張り今少し丁寧に説明すべきだったと考え直した探訪子は、「土佐の酒に惹かれ、酒を愛する友にも惹かれ、機會あらば幾度でも土佐を訪れようと常々思って來ましたから、モダンメディアの取材先候補として高知衛研をバリストの上位に挙げ續けて來て、今回漸く其の思いが叶ったという譯です」と、馬鹿正直に、いわずもがなの内部事情を吐露してしまった。

嗚呼大失策！これでは「高知を訪れる理由」の説明にはなっていない。「高知衛研を訪れる理由」の説明には全然なっていない。しかし、福永所長が破顔一笑し、傍らに座す間崎次長の顔にも笑みが浮かぶのを横目で確認した探訪子は、ホッと安堵の胸を撫でおろす。ああよかった。土佐で通用する古今不易の免罪符は、何と云っても矢張り「酒」だったのだ。

扱て、次は、探訪子から福永所長に質問する順番である。

（Ⅱ）福永所長の顔に刻まれた高知衛研の苦惱：人的＆物的リソースの減少が深刻

福永先生、率爾ながら御尋ねしますが、先生の御顔に刻まれた苦惱の痕跡は何を意味するのでせう

か？と、聲を出して質問した譯ではない。しかし、此の無言の問いへの答は、問わず語りに次から次へと福永所長の口から迸（ほとばし）り出て來るのであった。

其れがどのような言辭であつたかを逐一紹介するには探訪子の記憶が薄れ過ぎているので、読者には先ず此れ（↓）を見て頂きたい。勤勉探訪子の「取材メモ」の一部である。

明治31.	警察部衛生課に衛生試験室を設置。
昭和17. 1	衛生試験室を内政部衛生課の所管とする。
昭和20. 7	戦災により、業務を工業試験場及び市民病院に分散する。
昭和24. 7	動物舎（12坪）汚物焼却場（6坪）倉庫（3坪）新築。
昭和25. 1	高知県衛生研究所設置条例制定。
昭和25. 7	高知県衛生研究所処務規程制定、庶務課、微生物検査部、理化学試験部、病理臨床試験部、食品獣疫検査部の1課4部制となる。
昭和25. 10	本館（140.29坪）、理化学試験室（67.81坪）、獣疫試験室（12坪）、付属建物（11坪）新築。
昭和32. 1	動物舎（9坪）、車庫（36坪）、 <u>新增築</u> 。
昭和39. 5	高知県衛生研究所規則制定。
昭和39. 6	微生物部にウイルス病研究室を <u>新設</u> 。
昭和42. 1	高知県行政組織規則制定。総務課、微生物部、理化学部、臨床病理部、食品獣疫部の1課4部制となる。
昭和46. 4	公害部を新設。
昭和48. 4	保健衛生総合庁舎内に移転。
昭和48. 4	公害部の業務を「公害防止センター」に移管。
昭和55. 4	臨床病理部を病理部に名称変更。
昭和63. 2	病理部第3研究室増床（19.7坪）。
平成3. 2	バイオハザード対策実験室、理化学第2研究室、理化学第3研究室、食品獣疫研究室の増床（46.8坪）。
平成9. 4	高知県行政組織規則改正により、総務課、企画研修部、保健科学部、生活科学部の1課3部制となる。
平成15. 4	機構改革により、総務課、保健科学部、生活科学部の1課2部制となる。
平成19. 4	機構改革により、保健科学部が保健科学課に、生活科学部が生活科学課となり、総務課との3課体制となった。

写真4 高知衛研の沿革。平成3年までは順調な上り調子だったが、以後、何故か失速（出典：高知県衛生研究所報第54号）。矢印や下線等は筆者のメモ。

平成3年2月までは、「新築」、「新增築」、「新設」、「増床」といった景気のいい言葉が随所に見られるのに對し、それ以降は、恰かも坂道を転げ落ちるかの如く、従来の「1課4部制」が「1課3部制」になり「1課2部制」を経て遂には「3課0部制」へと褪縮の一途を辿り今日に至っている。これは一體全體何としたことか！？

改革派知事の先駆けとして華々しく登場した前高

知縣知事橋本大二郎氏は、平成3年12月から同19年12月まで実に16年という長期に亘って縣政のトップに座し續けた。丁度其の期間に合致して、上記した「高知衛研の褪縮」が起きていることをば、偶然の一致で片付ける譯には行くまい。

しかし、少々注意深く上掲の「沿革」を見てみると、橋本縣政の初期～中期には特記すべきネガティブ現象が高知衛研に發生してはいない。それが顕著に起こり始めたのは平成15年からである（「平成15.4 機構改革により云々」&「平成19.4 機構改革により云々」）。キーワードは「機構改革」。云わずと知れたミ（二）スター規制緩和＝小泉元首相の蒔いた種である。平成13年に首相の座についた小泉氏が着火源となり、以後急速に「規制緩和」／「三位一体」／「機構改革」の動きが燎原の火の如く全國津々浦々に広がって行った。そのトバッチリで高知衛研がネガティブにカイカクされてしまった.....ののだろうか？

それだけではないかもしれない。平成14年4月に小泉首相は「総合規制改革會議」を設置し、オリックスの宮内會長を民間人代表として官邸に招いた。そのオリックスが代表企業を務めたというピーエフアイ社と、高知縣・市との間で、官民合作事業であるところの「あの高知医療センター」の契約締結式が行われたのが平成14年12月。その4ヶ月後に高知衛研が機構改革により1課3部制から1課2部制へと縮小されている。この流れを偶然の産物とみるか。あるいは縣の財政逼迫による必然の産物と見るか。それとも、.....

おっと、探訪子は、またまた白昼夢の世界を勝手に彷徨っていたようだ。目覺めて現實に戻ると、福永所長の聲が聞こえ始めた。「衛研というところは、ヘテロな目線を持つヘテロな職種の人々の集合體であるべきなんです、例えば獣醫師が辞めたり引き抜かれたりして、今は半数以上が薬剤師になっています。人的にせよ物的にせよ、一旦失われたインフラストラクチャーを元に戻すことは出来んですよ」。探訪子「いま何人ですか？」。所長「17人です」。

事態は深刻である。高知衛研の此の窮状は和歌山衛環研の其れ＝「竹槍で頑張る」（モダンメディア53巻2號参照）に匹敵するかもしれない。しかし、今のコンテキストで思い出すべきなのは、和歌山縣ではなく、前回の訪問地鳥取縣であるべきなのだ。何故？

（Ⅲ）衛研はブラック・ボックスではない：高知新聞紙面を通じて縣民への情報提供

橋本氏同様の「改革派」片山知事の膝元で抜本改革された鳥取衛環研が「溜息の出るような明るい存在だったこと（モダンメディア54巻10號参照）」を想起して、彼我の此の極端な相違が奈邊に由來したのだろうか、探訪子が再び白昼夢の妄想の世界に引きずり込まれそうになった時、福永所長の聲が聞こえた。「縣は常々、衛研はブラック・ボックスだ！と云うちょっとした、何とかしてclarityを上げないかと努力して來ました」。其の努力の一端は此れ（↓）である。



写真5 2008年12月12日付の高知新聞。
感染症情報が毎週金曜日に定期掲載される。

高知衛研を冷遇したかに見える晩期の橋本知事と対決する姿勢を見せていたらしい高知新聞が、今、高知衛研を盛り立てる役割を果たしてくれているように見える。此の構圖を面白がっているのは探訪子ひとりなのだろうか。

(Ⅳ) 高知衛研の實力：例えば千屋誠造保健 科學課長をリーダーとする日本紅斑熱 の四国4縣共同研究

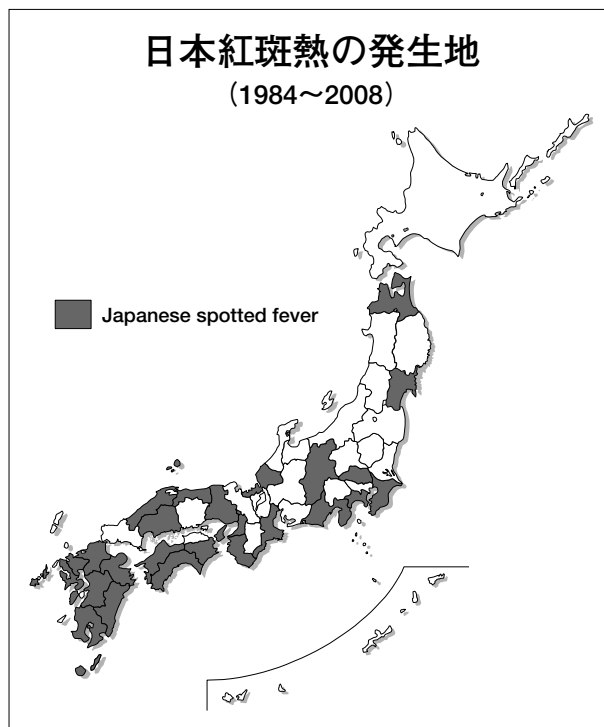
常ならば此の邊りで所長の総論が終わり、関係者打ち揃って所内ツアーへと腰を上げる頃合いなれど、福永所長の熱辯は一向に已む氣配がない。「しかしですな、貧しくなったらなったなりに、活路もない譯ぢやないんです。例えば四国4縣連携事業というのがありましてな」と云いながら隣席の千屋誠造保健科學課長の顔を覗き込む。



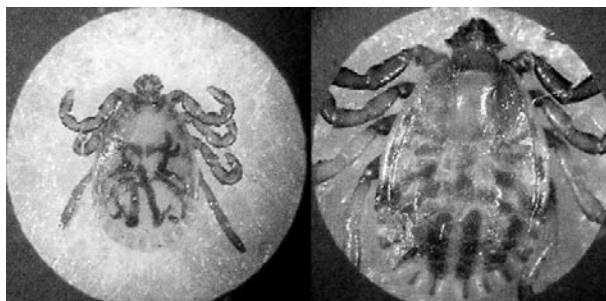
寫眞6 日本紅斑熱研究の専門家、千屋誠造保健科學課長。

福永所長はさらに続けた。「この千屋課長は日本紅斑熱の大家なんですけども、探訪子殿は日本紅斑熱のことを知っちゅうかえ?」。探訪子「病原體がリケッチア。バクターがダニですね。よくは知らなかったのですが、前々回の訪問地が島根衛研だったので、其處で色々と教えて頂きました」。所長「あっそうか、島根半島や隠岐島でも症例が出てるそうですからな」。探訪子「ダニはダニでも、山形衛研を訪れた時には、あそこは確か日本紅斑熱ではなくツツガムシ病だったような気がします」。所長「きっとそうですよ。日本紅斑熱は主に關東以西の病氣ですからな(右上圖参照)」。

私事ながら探訪子は日本紅斑熱に一種親近感を覚える。ここ數年携わって來たE型肝炎との間に共通點が少々あるからだ。いずれも四類感染症に分類されていること、年間高々100例位しか報告されていないが、中には重症化し死亡する例も存在すること、



寫眞7 日本紅斑熱發生分布圖。
四国では何故か香川縣だけが抜けている。



寫眞8 高知縣に存在するマダニのうち、キチマダニ(左)とヤマアラシチマダニ(右)。この他にもフタトゲチマダニやタカサゴキラマダニ等が *Rickettsia japonica* を保有していると考えられている。

地域分布に偏りがあること、輸入感染も存在すること、研究費が然程潤澤ではなさそうなこと、等である。

閑話休題、福永所長の熱辯は既に先を走っている。「これはやっぱりなんとかしないといけないということになりましたですな.....」。探訪子「日本紅斑熱をですか?」。所長「いやいや、地方衛研が縣單位でチマチマやっけていても限界があるということをですよ」。探訪子「あっ、それで四国4縣連携研究を」。所長「然り。各縣が一致協力して共同研究しやうということになって、その最初のテーマとして此の日本紅斑熱が選ばれて、千屋課長が音頭をとったという譯ですわ」。

素晴らしい！實に素晴らしい！前回の鳥取縣之巻にも、豫てからの持論＝「衛研的研究の健全で實効ある継続と発展の為には、融通無礙の衛研間共同研究の更なる促進が必須である」を開陳した探訪子としては、心の中で快哉を叫びたい思いがする。地方衛研は世の荒波に翻弄される小舟の如くして、近時の研究環境悪化は紛れもない事実ではあるが、流れに飲み込まれて「貧すれば鈍す」では不可い。嗚呼、高知に來てよかった。その逆の「窮すれば通ず」の實例が此處に在ったのである。

(V) ノロウイルスに関する興味深い公開實驗

福永所長以外の方々から話を聞く機会が漸くにして訪れた。



写真9 保健科學課の松本道明地域保健擔當チーフ(左)、池野宏彦感染症擔當チーフ(中)、細見卓司主任研究員(右)。

衛研が決してブラックボックス的存在ではないことを示す様々な試みが為されている中で、高知新聞紙面を借りた定期的情報発信については既に述べたが、その他にも、例えば中学三年生を來所させて實施した職場體驗學習(農藥検査の見學や電子顕微鏡を用いたウイルス觀察等)も注目に値する試みである。しかし、もっと面白いと探訪子が思った試みは、松本チーフから聞いた、感染豫防の為の「出前講座」の話である。

例えばノロウイルスに感染している人が居室内や病室内で嘔吐したとする時、吐瀉物が(＝ウイルスが)どのくらい遠くまで飛び散るのだろうか？.....という衛生上の素朴な疑問に對する回答を、老人保健施設のスタッフや學校保健關係の養護教諭達の目の前で、公開實驗して見せようというのが此の「出前講座」の目的である。無論、高知衛研所員のうちの誰かが實際に嘔吐して見せる譯ではなく、また本

物の胃内容物を用いるのでもなく、全ては模擬實驗なのであるが、これは模擬だからこそ面白い。何故なら其處には知恵と工夫が必要だからである。高知衛研の發明した模擬吐瀉物が如何なる組成で出來ているものであるかを、探訪子は此處に公開する譯には行かない。大袈裟なことを云うようだが、それは立派な知的財産であるからだ(別の理由は「聞いたが忘れた」からだ)。興味ある方々は高知衛研から直接御教示を賜って頂きたい。

その一方で、同じく感染豫防を目的としながらも、細見主任研究員から聞いた「事前對應型ノロウイルス感染症對策」に關する調査研究の話は、探訪子を少々失望させた。其の譯は、折角の科學的アプローチであるにも拘らず、インフラ不足の為に「サイエンスになり切れないでいる」からである。勿體ぶらずに具體的に書けば、折角PCR等でノロウイルスを検出しておきながら、そのDNA塩基配列の解析が為されていないのである。

感染源を特定したり、感染の連鎖を後方視的にトレースしたりする為には、検出されたウイルスの塩基配列解析が必須なのである。しかし、それをやらないでいるのは決して細見主任研究員が怠惰だからではない。シークエンサーが無いからである。正確に書けば、シークエンサーは他部局には有る。一台だけ有るには有るが、其の一台を縣の3つの研究機關(高知縣畜産試験場等)の間で「回して使っているため順番が回ってこない」のだ。今や備品の不足と老朽化が全國彼方此方の衛研の共通の宿痼となっている。歎息せざるを得ない。(取材後、間崎次長からの連絡によると、昨年度の補正豫算でシークエンサーの購入が決まり、今期早々に入ることになったそうだ。高知衛研での試験研究にさらなる展望が開けたことは疑う餘地もない。)

(VI) 福永所長からの助け舟：土佐ジローの卵を使ったカステラでコーヒー・ブレイク

自分のラボにはシークエンサーが3台あることを思い出し、少々ウシロメタイ氣がして來た探訪子の沈鬱な心を讀み取られたのであろうか、「此處で一寸休憩を入れませう」とて福永所長は我々に特製のカステラを出して下さった。何故に「特製」というと、使われている卵が特別なのである。高知縣

畜産試験場で開発され、安芸市の畑山温泉などで飼育されている土佐ジローという品種名の鶏が産んだ卵である。高知に詳しくない読者は知らないだろうが、探訪子は土佐ジローを知っている。何年か前に桂浜の某旅館で初めて食べた土佐ジローの生卵御飯の感激が今も忘れられないでいる（から今夜も其の某旅館に泊まる予定になっている）。

それにしても福永所長の氣遣いは顔に似ず繊細である。探訪子の如き終戦直後に生まれた人間（＝高知衛研訪問の丁度10日前に還暦の誕生日を迎えた）にとって、カステラは深層心理中で最上級にランクされる菓子の一つである（蛇足ながら、果物ではバナナである）。蓋し同年輩の福永所長には然様の事情が御見通しなのであらう。有難や、元氣が回復した。今後カステラを食べる機会が訪れる度に福永所長の顔を憶い出すかもしれない。

（Ⅶ）所内ツアーへの出発：先導役は西森一誠生活科学課長

舌鋒鋭き福永所長からバトンを渡された西森一誠生活科学課長の舌尖は滑らかだった。「あるメッキ工場で場内側溝に亀裂が見つかり、汚染状況を見るために地下水の調査を行なったところ、地下水脈の興味深い流れに気がきました」というような話がスラスラ出て来る。確かに、そういう異變でも起こらない限り、地下水の調査など行なわれないだろうから、サイエンティストは然様な機会を大切にせねばならない。西森課長の話も顔も全然深刻でないのが

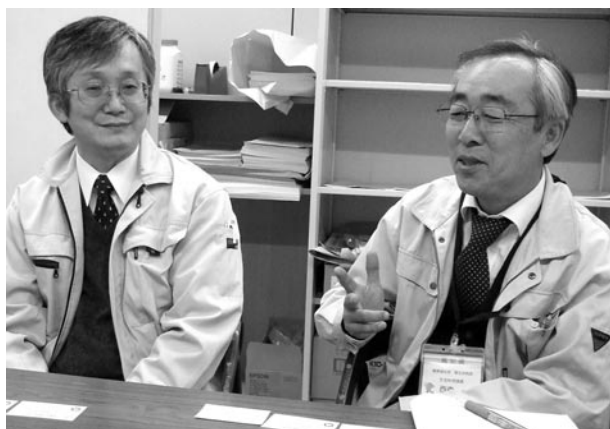


写真10 生活科学課の宅間範雄チーフ（左）と西森一誠課長（右）。何故だろうか、御二人の表情は明るい。

探訪子を安心させた。

扨て、あんまり見て頂くようなものは無いんですけれども、という西森課長のアポロジーに促され、我々は會議室を出て階段を昇る。



写真11 高知衛研の階段。「楽しもう」は一寸皮肉だ。

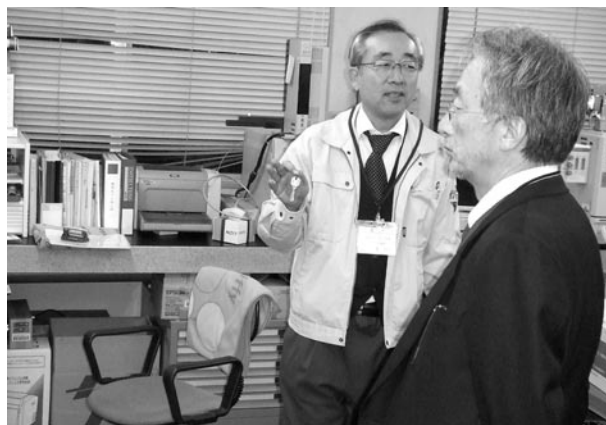


写真12 西森課長（左）の説明を上の方で聞き流す、例によって妄想中の探訪子（右）。

午後5時過ぎ、所内ツアーが無事に終了した。真面目な話は殆ど記憶にないが、縣西南部への単身赴任歴のある西森課長から聞いた同地域に関する雑談（例えば「東京から到達するのに、如何なる交通手段を使っても、最も時間が掛かるのは足摺岬です」という話）だけは、不思議と今も耳に残っている。



写真 13 検体保管室に置かれた冷凍庫の数々。何處から調達されたのだろうか、アイスクリーム販売用冷凍庫も立派に廃物利用されている。窮すれば通ず。



写真 14 ウエストナイル熱ウイルスや日本脳炎ウイルスの調査の為に使用された蚊捕集器。斯かる「工夫の産物」を見ると嬉しくなる。

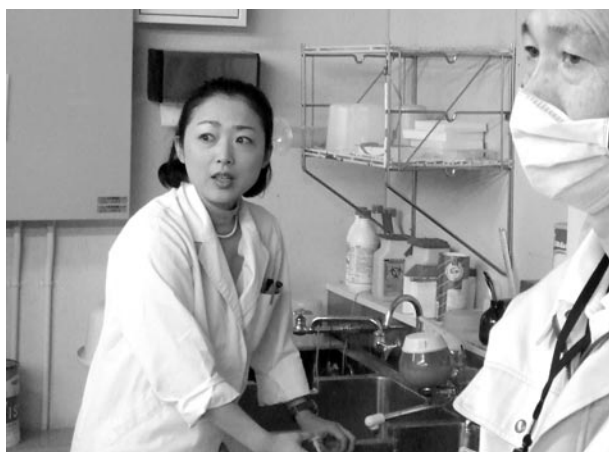


写真 15 谷脇妙主任研究員(左)と池野チーフ(右)。ラボで手を動かしている女性を見るともっと嬉しくなる。

(Ⅷ) 衛研を辭し桂浜で反省會：たっすいがはいかん！

福永所長と間崎次長に見送られて玄關を出る。戸外は既に暗く、小雨降る中を小走りに歩き高知城の追手門を(内から外へ)くぐると、闇の中に幻想的な光の世界が浮かび上がっていた。



写真 16 高知城追手門外のライトワーク。但し電飾ではない。光源は蠟燭だから、これも「エコ」なのだろうか。

其處から徒歩5分の某ホテルのロビーで荒川／牛久保兩氏と別れ、探訪子は桂浜の某旅館へと先を急ぐ。公私に亘る人生の先達大西三朗高知大學消化器内科教授、前述した地球33番地クリニック院長前田隆イゴッソ先生、それに何故か旧知の妙齡土佐女性(ハチキン?)1名を加えた総勢4名で久闊を叙するのが目的である。

御想像の如く、皆「酒豪」である。用意されていた土佐の酒5～6本(但し720ml/bottle)が一時間以内に全て空瓶と化して畳の上に横たわった。「何處の酒でもいいから出せ」と命ぜられ宿の女将が持って來た酒は、産地も名前も忘れたが、決して悪い酒ではなく、寧ろ、名の通った「良い酒」であった筈だ。にもかかわらず、開栓直後、土佐人三人から異口同音に失望の言葉が発せられた：「たっすいね此の酒は！」。

(註：インターネットで調べてみると、土佐辯のタッスイは「味が薄い」とか「頼りない」の意らしいが、大西教授の秘書坂本りつ子女史によれば、「鮮度が落ちて、歯ごたえがフニャフニャな林檎とかにもタッスイっていいです」との由)

忽然、フニャフニャ探訪子の眼から鱗が落ちた。
 そうか、そうだったのか！

本稿の枕に登場させた土佐出身の文人大町桂月は、明治32年に島根縣簸川郡立簸川中学校（現在の出雲高校）に赴任した。その桂月の観察によれば、出雲人は「柔弱にして陰険／廉恥を重んずる風なく／義に勇む俠骨なし／概して云へば小利口なれど誠意と熱情なし」の如く、ポロクソに貶されている（出典：藤岡大拙「出雲人」1991年、ハーベスト出版）。従前此の過剰な批判に戸惑いを覚えて来たが、味は薄きを好み何事も曖昧なるを好む出雲人の一人である探訪子から見て、桂月の此の出雲人批評は、半分の客観と半分の主観から成り立っていて、足し合わせれば非常に正鵠を射た「土佐人による出雲人論」であると、今にして合點が行く。即ち、桂月も、「たっすいがはいかん！」という性癖を持つ由緒正しき土佐人だったのだ。

斯くて、やがて書かねばならぬ高知衛研訪問記（＝本稿のこと）には龍馬ではなく桂月を登場させ

ようと即決した探訪子の脳裡には、あれを書こう、これも書こうと、様々のプロットが消えつ浮かびつするほどに、もう樂勝だ、いつでも書けるという危険な安心感が生まれた。その擧句、今回は常になく脱稿が遅れてしまったことを、關係諸兄姉に深く御詫び申し上げる。



高知衛研の活動実績の極く一部しか紹介せず、しかも探訪子の主観（＝偏見）が過剰に入った形の訪問記となってしまう、さぞかし高知衛研の方々は「泥棒から説教される」氣分で本稿を読まれたに相違ない。それもこれも、嘗て大町桂月に説教された出雲人の末裔である探訪子が、柄にもなくイゴッソの眞似をして、廉恥を重んじ／義に勇み／誠意と熱情を以て本稿執筆に臨んだ結果であると御理解頂き、何卒御容赦願ひ度い。

（探訪子＝三代俊治）